「京都の歴史を歩こう！―紫野編―」歴史遠足報告

福間　優華

2016 年 10 月 29 日、京都府立総合資料館寺子屋講座として、歴史遠足「京都の歴史を歩こう！―紫野編―」が開催された。この遠足は京都府立大学文学部歴史学科の学生が主体となって企画・運営し、「近代化する京都郊外」をテーマに紫野地域の歴史を解説した。以下、当日の流れとそれを踏まえての反省点を述べていきたい。

１．出発

当日、学生は午前 9 時に今宮神社に集合し、行程や段取りの最終確認をおこなった。午前 9 時半頃から絵馬殿で参加者の受付を開始し、参加者にしおりと名札、京都府立総合資料館のクリアファイルを渡した。その後、受付を終えた方から順に学生 1 人と参加者 2、3 人からなるグループを作っていった。午前 10 時頃に参加者全員が集合し終え、学生代表からの挨拶と遠足のテーマ説明がおこなわれ、遠足がスタートし、まず受付場所の絵馬殿の能の番組について説明した（写真 1）。

写真１　絵馬殿の様子

２．今宮神社

その後、受付場所の絵馬殿から織姫社まで移動したが、その道中にある「あり須川橋」と書かれた橋の欄干や「阿呆賢さん」と呼ばれる石について、各グループの学生がそれぞれ参加者に説明し、織姫社前では今宮神社の由緒や西陣地区とのつながりについて解説した。

次いで境内の建築物に関するクイズを出題し、各グループは本殿にて参拝をおこない境内を自由に見学した。参加者はクイズのヒントになりそうなものを探したり、境内にある摂社群や石碑を見て回ったりしていた。学生も同じグループの参加者と一緒に回り、参加者が興味を示したものを解説した。

数分後東門に集合し、クイズの答え合わせと解説をおこない、現在の楼門が建つ前は参道であった東側の道を進み、その先の六差路で信号待ちの時間を利用して、先ほど見た「あり須川橋」欄干や次に向かう大徳寺の水路とも関連する、かつて流れていた有栖川について説明した。

3．大徳寺

大徳寺の総見院・聚光院・三玄院など戦国武将ゆかりの塔頭が立ち並ぶ様子を眺めながら、学生はそれぞれのグループの参加者に塔頭の説明と方丈・法堂・仏殿・三門が一直線に建ち並ぶ禅宗寺院に特有の伽藍配置についての解説をおこなった。

写真 2　大徳寺の解説

その後、仏殿前に集合し、近世以前の大徳寺が現在よりはるかに広大な寺領を有していたこと、その寺領は明治維新に伴う廃仏毀釈と上知令によって大幅に縮小されたことを解説した。さらに大徳寺の塔頭の興臨院にあった唐門が明治期に現在の位置へ移築されたことなど、大徳寺が近代以降どのような歴史をたどってきたかを述べた（写真 2）。

仏殿前での解説後は休憩時間を設け、学生はグループの参加者とはぐれないよう注意しながら境内を見て回った。

4．玄武神社

休憩時間後、各グループで点呼をとり、参加者が全員集まっていることを確認し出発した。新大宮商店街を抜けて玄武神社に至るまでの間、学生たちはそれぞれ「新」大宮と呼ばれる由来や、付近にあった市電架線柱・若宮八幡宮・今宮神社旅所について解説した。このなかでも今宮神社旅所は出発地点であった今宮神社とも関係しており、近年、明治期に催され賑わいを呈していた御旅能の復興活動がおこなわれているということもあって、興味を示す参加者も多かった。

写真 3　玄武神社の解説

玄武神社では、まず神社への関心を深めてもらうために神社内にある亀を探そうという課題を出した。手水舎に置かれている亀が見つかった後、玄武神社の由緒などを説明した。また、鳥居の左右の第一工業製薬献灯の石灯籠に注目し、基壇正面に刻まれた「玄武石鹸」が何を指すのか、いつ発売されたのか、なぜ「玄武」の名を冠しているかなどを解説した（写真 3）。

その後、玄武神社の付近に残っている二俣川跡を見に行き、この界隈で川の水を利用した生業が営まれていたことを話し、次の地点である船岡山に向かって出発した。

５．建勲神社・船岡山公園

玄武神社から船岡山までの道には建勲神社の社号標があるが、その社格部分（別格官幣の字）がセメントで塗り固められていたことを確認した。これは戦後、政教分離に反するものとしてGHQに目をつけられることを恐れて、神社側がおこなったものと考えられている。

その後、船岡山の麓に到着した。当初、同山頂付近にある建勲神社まで登って解説することになっており、体力的に登るのが厳しい参加者のために段差の少ない別ルートも用意していた。しかし、前日の雨の影響で足場が悪いこともあり、その場で建勲神社を解説し、全員で段差の少ないルートを進むことになった。

船岡山公園のラジオ塔付近に集合し、近代京都の都市開発と船岡山公園の関係やラジオ塔の保存と活用について解説をおこない、最後のクイズを出題した。このクイズでは船岡山公園が大徳寺の借地であるということを伝え、参加者に紫野地域のつながりを再認識できるよう工夫した。

以上ですべての行程が終了し、学生代表が挨拶して解散となった。アンケート回答後、希望者には学生が船岡山頂上まで誘導することを伝え、帰路につく参加者は最寄りのバス停まで担当の学生が誘導した。

６．１年間の準備と歴史遠足を終えて

解散後、午後２時頃に大学で反省会をおこなった。メンバーはアンケートの意見・感想を読み、事前学習から遠足終了までの問題点、改善点について話し合った。全体的に高評価を得たが、当日起こりうる非常事態なども含めた事前の準備不足やメンバー間の連携不足など、反省すべきことも多いことを再確認した。これらは来年度の歴史遠足をより充実したものとするため次年度の担当学生にも伝えていきたい。

今回、歴史遠足の企画・運営を通して、インプットした情報を第三者へアウトプットすることの難しさと楽しさを学ぶことができた。この経験を今後もさまざまな場面で活かしていきたいと思う。